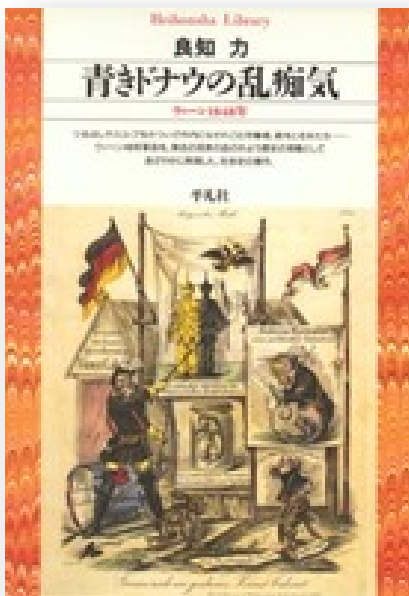


文学部 教授 日暮美奈子

大学に入学すると、それまでに身につけた知識や考えが授業や読書を通じて大きく揺らぎ、ショックを受けることがあると思います。しかし、大学らしい勉強はまさにこうした経験から始まると言えるでしょう。

歴史学の分野においても、そのきっかけを与えてくれる研究成果は数多く存在します。ここでは、良知力『青きドナウの乱痴気 ウィーン 1848 年』を紹介しましょう。副題が示すように、この作品はオーストリアの首都ウィーンでの 1848 年革命を扱ったものです。この革命は一般に「失敗した」市民革命とみなされていましたが、著者は市民ではなく市井の人びと、とりわけ余所からウィーンに流れつき市壁の外に住んでいた民衆を主人公とみなすことにより、革命のもつ別の側面を明るみにしています。

そしてなんと言っても、この作品の魅力はこの街に関する良知氏の博学な知識と臨場感あふれる語り口ににあります。関係を紡ぎあい、ぶつかり合いながら人びとが社会を動かして行くさまを鮮やかに描き出す著者の手腕には、読むたびにいつも唸ってしまいます。初版からすでに 30 年以上を経ています、ヨーロッパ社会史研究の一つの到達点を示すものとして今なお大きな意味を持つ作品です。



青きドナウの乱痴気：ウィーン 1848 年

／ 良知力著

平凡社，1993.10(平凡社ライブラリー)

本 館 K/234/R11

神田分館 X/081/H51